

【調査研究の現場から @アメリカ】

今回、機構の若手研究者海外派遣プログラムの一環として、「米国東海岸における19世紀日本関連在外資料の調査－タウンゼント・ハリス及び日本開国への米国の関与に焦点を当てて」というテーマで、アメリカのニューヨーク市立大学 ([City College of New York: CCNY](http://www.ccnyc.edu/)) に行ってきました(写真1)。

タウンゼント・ハリスは、1856(安政三)年から62(文久二)年にかけて日本(下田・江戸)に駐在したアメリカの初代駐日総領事として有名ですが、彼はそれに先立つ1840年代まで、ニューヨークで中国陶磁器を商う傍ら、同市の教育委員長として、無償の高等教育機関フリーアカデミーの創設(1847年)に尽力しました。その後身機関であるCCNYの大学図書館には、その縁から、ハリスの日本関係史料が所蔵されています(写真2・3)。それはハリスが主に日本滞在中の前半期(1856年～58年)につづった日記や、1854年～75年に送受信した多数の手稿書翰群を収録しますが、その調査と活用は、ハリスの日記を除けばほとんど進んでいません。今回の滞在の最大の目的は、この書翰群の翻刻と分析でした。

半年間の滞在中を通じ、ハリスが発信した書翰群(計843通)は62%の翻刻・分析が進みました。ハリスが様々な人びとから受信した書翰群(計485通)は、筆跡の多様性から解読により時間がかかり、12%の翻刻・分析を終えた状況です。滞在終盤には、史料の高精度スキャンや、難読史料の翻刻を依頼できる業者の割り出しなど、今後も継続的に調査を推進する環境を整え、帰国しました。書翰中には、ハリスが交渉した日米修好通商条約の締結前夜の緊迫した政治情勢や、通商条約一番乗りを競ったオランダ駐日代表との関係、ハリスが香港・上海・バンコクなどアジア諸港に有していた広範な人脈など、従来あまり知られていなかった日本開国史をめぐる興味深い情報が満載です。今後、根気強く調査を継続し、その成果は、執筆を予定しているハリスの伝記を始め、様々な形で公開していく予定です。

滞在中には、ホストのCCNYコーエン図書館文書室長シドニー・ファン・ノルト教授やチャールズ・スチュアート図書館長を始め、大学図書館の皆さんから暖かいサポートを頂きました。研究開始から1ヵ月後の2018年7月17日には、下田市の代表団がCCNYを訪ねてハリスの功績を顕彰するイベントが行われ、私もショート・スピーチを行いました(写真4)。滞在終盤の12月6日には、図書館文書室で公開講演“International race toward Japan's opening?: Harris' rivalry with the European powers, 1858-61”を行い、対日外交におけるハリスと他の西洋諸国の駐日外交代表らとの競合関係について講演しました。講演後は活発な質疑応答が続き、有意義な研究交流の機会となりました(写真5)。



写真1：CCNY キャンパスのシェパード・ホール



写真2：CCNY 所蔵ハリス日本関係史料（Letters and Papers of Townsend Harris）の主要部分



写真3：ハリス日本関係史料中、ハリスの発信書翰の写しを収めた帳面（計5冊）



写真4：CCNY・下田交流イベントでのショート・スピーチ



写真5：CCNY 図書館文書室での公開講演・質疑応答を終えオーディエンスの皆さんと集合写真